

新篇 膳左下丹

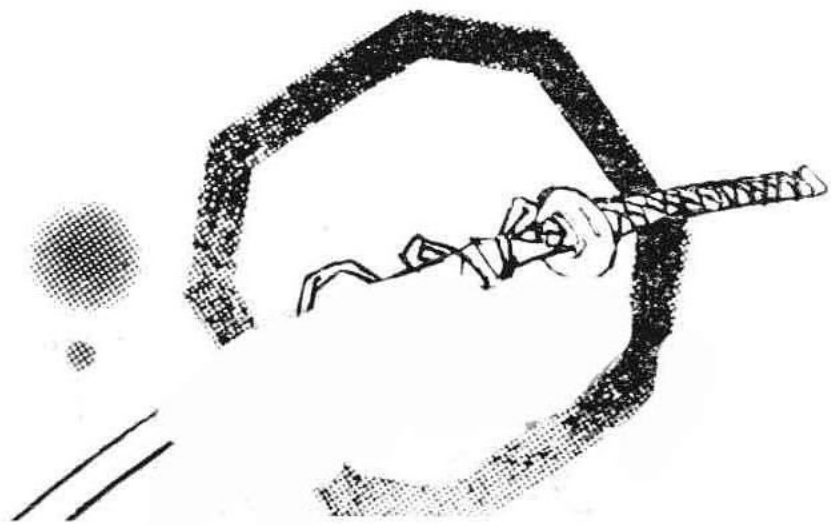
川口松太郎

双葉新書

時代小説全集

左膳

川口 松太郎



双葉新書

時代小説全集 4

新篇 丹 下 左 膳

双葉新書 290円 (検印廃止)

昭和39年1月1日 初版発行

著 者 川 口 松 太 郎

発 行 者 矢 沢 領 一

発 行 所 株式会社 双葉社
東京都新宿区市ガ谷田町3の17
振替 東京 117299

印 刷 者 浅 野 剛
東京都大田区鶴ノ木町 305
株式会社 金羊社

C. Maruo ©1964 Printed in Japan

落丁乱丁本がありました場合にはお取りかえします (山晃製本)

新

篇

丹

下

左

膳

目次

[illegible]

刀代百両	一〇六
江戸奉公	一〇七
木曾路	一〇八
片手剣法	一〇九
御三家会議	一一〇
湯小屋	一一一
再び国貞	一一二
立志行	一一三
その行方	一一四
江戸の英雄	一一五
千葉道場	一一六
雪夜	一一七
邂逅	一一八
お富とお志保	一一九

駕……………二三

二人左膳……………二二七

いたいた左膳……………二四〇

謎……………二五三

三つ巴……………二五八

江戸出発……………二七一

山深く……………二九一

終結……………三三八

装幀……鴨下晁湖
挿絵……成瀬一富

斬^き 棄^{すて} 御^ご 免^{めん}

一

「見ろ、暮れて来たぞ」

「はい」

「さ、急ごう、急ごう」

左衛門は道を急ぎ出した。

松の梢に夕月がうつすりとかかっている。

「もう宿が見えております、お急ぎなさらずとも、好うございましょう」

老妻のかつが、あえぎながらいった。

「いや、左市が待ちわびていよう、一刻も早く戻ってやりたい、土産の刀を見せてやりたい」

「もう間近かでございます。お急ぎにならずともゆっくりお出で遊ばして……草鞋が切れておりますので」

「切れたら脱いでまいれ、もう足袋で好い、足袋で行ける」

「それに、あの……」

「ツベコベ申すな、早く歩め」

あせって妻を叱った。

半月の長旅で、留守番の件が気になる。

名古屋の刀剣商から手に入れた国貞を、早く見せたかった。親子が半月も別れて暮したのは初めての事で、子煩悩の左衛門は氣ばかりあせった。

「年だな」

道の抄らぬのが悲しかった。

息を切って尾いてくる妻の姿も淋しかった。

お互いに年を老った。

「勝！」

「はい」

「ゆっくり行こう」

「はい」

「はっはっはっはっは、息を切らしておるな」

「笑いごとではございませぬ、息が切れまして……もう道中はできません」

「お互いにこれが死土産だ」

「左様でございます」

「好い保養をいたしたな」

「はい」

「左市にも、これを見せたら喜ぶぞ」

「長年欲しがっておりましたので、どんなに喜びましょ
う」

「斯程の銘刀が手に入ろうとは思わなんだ、全く好い土
産じゃ、左市にはちと分にすぎておるが……」

「併し、一生道具でございますから、好いものを買って
やった方が、為めによろしゅうございます」

「お蔭で路用の大半をこの刀に費ってしまった」

「二十五両でございましたか」

「うむ」

「好いお値段でございますな」

「それでもまだ安い、江戸の刀剣商では、連も……相手
によれば百両ぐらいには平気で吹っかける品だ」

「それは、それは……」

「和泉守国貞と名乗る鍛冶は三人居るが、名人といわれ
るのは二代目国貞で、後に真改と改め、刀ばかりでなく
書も好く書いた達人だ、銘を井上真改と切つてあれば、
六十両下では手に入らぬが、和泉守国貞と切つてあるの
は、若作りで、五十両下でも買える。が、二十五両は法
外に安い」

「好いものが手に入りました、好うございました」

「好かった、全く好かった」

夫婦は夢中だった。

土産の国貞が嬉しくて堪らなかった。

中津川の町が見える土手の上を、一隊の行列が通りか
かっているのさえ、気がつかなかった。

二

土手を上ると、細い一本道が中津川の町へつづいてい
る。宿外れへはあと五六町だ。

勝の手を引きずって松の根方を上ると、

「無礼者！ 退けッ」

不意に、左衛門の胸を突く者があった。よろけて草の
上へ踏み止まった、憤然とした。

「何をなさるッ」

「ナニッ」

「御無礼でござろう」

「黙れ、無礼者！」

武士は又叫んだ。

塗笠に、旅装束で、ぶっさき羽織を着ている。

七曲りの道で、後につづいている行列が見えなかった。

左衛門は構わず行きかけた。妻の手を引いて土手の向
う側へ降りようとした。

「待てッ！」

「……」

「待たんかッ」

「……」

酔ってるのだと思った。相手になるよりは構わずに行こうと妻の手を引いたまま行きすぎた。

武士は追ってきた。

柄袋を刎ね除けて、刀をぬきかけている。

くどい奴だ——いよいよ憤然とした。止って左衛門も身構えた。

妻が止めようとした時には、

「無礼者」

武士が斬りつけて来た。

ものをいっている暇もなかった。

左衛門も狼狽して土産の国貞を抜いた。

「貴下、貴下！」

勝は狂いのように叫んだが、どっちも引けなくなっていた。

土手の上から同じような武士が四五人走ってくる、野袴を穿いて抜刀の若い武士がいきなり左衛門に斬りつけた。

駆けよりざままで、目に止まらぬ早業だった。

「あッ」

勝は夢中で、飛び込んだ。

良人を救う気だったが、切先が左衛門より勝の肩をかすめた。左右から追い込まれて、左衛門は松を小楯に取った。

「参観の供先だ」

という事が、やっと判った。

「知らぬ事です、知らぬ事です。刀をお引き下さい、お詫びいたします、お詫び申します」

そういったが、相手は聞かなかった。

野袴の武士が、二の太刀を左衛門へつけて来た。右にも、左にも抜刀の武士が迫っている。

「お許しを願います、知らぬ事です、お許しを願います」

暮れかかる土手で叫ぶ左衛門を、左右から若い武士が滅多斬りに斬りつけた。五十八歳の左衛門は、もう腰がきまらなかった。

「お許しを、お許しを……」

と叫びながら、土手の叢へ落ち込んでいった。

三

左衛門夫婦はそれっきり動かなかった。

お勝はほんのかすり傷だが、動脈が切れて出血が多かったのだ。二人の死骸が土手下の叢へ落ち込むと、後供につづいて、鉦打びやううちの乗物が、狭い土手を急いできた。

「何事じゃ」

お供頭が、四辺の様子に気付いていった。

「お供先を切りましたのみか、抜刀して狼藉いたす浪人者を斬り棄てました」

野袴のびまの若い武士が答えた。

血糊ちのりの浮いている刀を持ったままだった。

「相手は何者じゃ」

「旅人風にございます」

「参観道中斬棄御免は公許のお家、お供先を汚せし奴に容赦は要らぬ。行けッ」

「はッ」

「お上のお耳に入るるな」

「承知仕りました」

乗物は土手を行きすぎた。中津川の本陣、市岡七右衛門へ投宿の予定で、先触さきふれはもう町へ入っている。

お乗物を見送ってから供頭はもう一度きいた。

「当地は何者の支配じゃ」

「遠山美濃守様御領地にござります」
とうやまのみのかみ

「苗木城主か」

「左様で……」

「一万石だな」

鼻の先に梅麩の色が浮んだ。

「念の為め、土地の代官に届け置け」

「はッ」

「お供に遅るるな、与一郎一人に任せてまいれ」

そういつて、供頭は駕を追って行った。先供もそれにつづいて佐藤与一郎という若い武士一人が、暗くなりかけた土手に残った。

倒れている左衛門の衣類で血糊を拭き、懷紙で拭いかけると……握っている刀が目についた。

ほの暗い土手下に光っている色合が、鮮かだった。

与一郎は首をかしげて見入った。やがて近付いて、もぎ取ろうとした。固く握っている指先を一本ずつ、はなして取上げた。すかして見ると、地鉄の細かな板目肌で丸味の大きい鉈ぼろし子先も美事に、乱れの少い直刃すくはで、ぞつとするような名刀だった。

「大したものを持っている奴だ」

与一郎はびっくりしてしまった。

生れてからまだこれだけのものを持った事がなかった。

目釘をぬいて、中心を調べて見たかったが……

斬棄の老爺に持たせて置いててもムダだし、ゆっくり見よう——そう思って、鞘に納めて、腰に落した。自分の分は風呂敷にまいてぶら下げた。四辺はすっかり暗くなっている。夕月が冴えて星が見え出した。

流石に与一郎も後めたい気がして夫婦の死骸に一礼してから駆け出した。後をも見ずに、一行を追いかけて走っていった。

四

美濃の中津川は中仙道要衝の地で、遠山美濃守の代官所があった。代官は佐伯佐兵衛といって世襲だった。

「たのむ」

佐藤与一郎は、真暗な代官所の式台へ立って、

「拙者は播州明石の城主、松平兵部大輔齊宣の家臣でござる」

声高に叫んだ。代官の佐兵衛は式台に手を下げて迎えた。

「参観御出府にて江戸へ上る御道中だが、宿外れの堤にかかりしところ、お供先を突切りて狼藉を働く浪人態の夫婦あり、不礼討ちいたした故、念の為めお届け申す、御足労ながら、御検死お願いいたしたく、当代官所に御迷惑はおかけ申さぬ。責は松平藩にてお引受け申す」

「場所は何れでございましょうか」

「宿より五六町、七曲りの土手下に死骸がござる」

「御道中は、本陣へ御投宿でございますな」

「左様！」

「場合によつては、後刻参上仕りまする」

「お待ち申す」

与一郎は姓名を名乗らなかつた。老人の刀を奪ったのが氣になつて、名をいえなかつたのだ。

佐兵衛は下役を三人連れて、宿外れの七曲りへいった迷惑な仕事だった。

供先の不礼討ちなぞは、古風な出来ごとで、近年は滅多にないことだった。

参観制度の出来たてには、斬られ損になった者もあるが、中津川では初めての珍事だ。

「夫婦二人を斬ったといったが、女らを何のために斬ったのか、乱暴な大名だ」

土手下を探しながら、佐兵衛はぶつぶついった。

やがて七曲りの東側の土手下に、雑草へ埋まった左衛

門夫婦の死骸が見つけれ出された。

「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」

唱名をとえながら提灯をさしつけた。

旅姿の老夫婦だった。

二人とももう事切れている。

「やッ、丹下先生だ」

佐兵衛が叫んだ。

「先生と奥方だッ」

三人の下役も仰天した。左衛門は三太刀。お勝は肩先の一太刀で死んでいる。

金森浪人の末裔が中津川宿唯一の手習い師匠だった。

「先生がどうしてこんなお姿になられたか、大名の供先で狼藉を働くようなお方ではないが……」

「兎も角も、左市殿へお知らせ申しましょう」

「直ぐに知らせろ、月番の庄屋へも沙汰をして集めろ」

間もなく左衛門の一子左市が駆けつけた。月番庄屋に世話役も集まった。

中津川ただ一人の手習い師匠は穩健質実で宿中の信頼を一身に集める人望家であった。

五

両親の死骸を前にして、左市は啞然としていた。

嘘のような気がして、父も母も死んだとは思えなかった。七曲りの土手下から、中津川の住居へ死骸を運んでも、涙が出なかった。

医者がきて傷口を調べたのも、ほんの申しわけで、

「お手当のしようがありません」

痛しげにそういったとき、左市の目に初めて涙が浮んだ。

目頭にぽつりと浮んだ一滴は、堰を切った奔流の一端も同じで、あとはもう止めどがなかった。泣くまいとしても、涙は意気地なく迸り出る。

近所の人たちもだんだん集まった。

左衛門と親しくしていた町の名望家も弔みにきた。その中には本陣の市岡七右衛門もいた。

「市岡様！」

左市は涙を押えて七右衛門にきいた。

「松平様は、今宵お泊りでございましょうか」

「本陣御一泊でいらっしゃいます」

「御覧のとおり、父は敢ない死をとげました。子として

黙視できませぬ。お供の重役方にお目にかかり、下手人お引渡しをお願いをいたそうと存じますが、お口添えが願えますまいか」

「私では駄目でございます」

七右衛門は首を振った。

「本陣といつても、所詮は宿屋の主人で、お取上げにはなりませぬ。それよりも佐伯様へお願い申上げては……」

代官の顔をのぞきながらいった。

「土地の代官所より、お掛け合いなされたら、松平様でも黙つてはおられますまい、宿屋の主人が申しますよりお代官のお言葉が、どれほど利益か判りませぬ、私ではとても、先方が相手にして下さいませぬ」

「小父様、いかがでございますよう」

左市は佐兵衛にきいた。佐兵衛は腕を組んで答えなかった。死んだ父の無二の親友が佐伯だった。

「小父様からお口添えが願われるでございますようか」

「然し……」

佐兵衛は眉をひそめた。

「松平兵部大輔様は、当將軍家のお子様でござる」

「……」

「たしか周丸君と仰せられたお方と存ずるが、明石侯へちかまるごふ

御養子となつてまいられ、御家督御相統遊ばされたお方。門地は八万石だが、將軍家お子様の権威を笠に、乱暴なお振舞も多いとか聞き及ぶお方なのだ」

「左様でございます」

七右衛門が直ぐにうなずいた。

「本陣へは四度目のお泊りでございますが、私共も腫物へ触るようにはいたしております」

「代官風情が何といつてもお取上げになるまい、何を申してもムダのような気がする」

「私もそう思います」

「所詮は泣く子と地頭だ。迂濶なことをいい出したら、又、どのような難題を吹きかけるかも知れぬ」

「まったく、それが恐ろしいでございます」

六

「お氣の毒には思うが、この上難儀がかかつて困る、口惜しかろうが辛抱なさい、相手が悪いのだ」

「まったく、相手が悪すぎます」

將軍家御子息。それが代官や本陣を怖がらせていた。

「では、父は斬られ損でしようか」

左市はやっと口をひらいた。

「百姓町人なれば兎も角、浪人ながら両刀を帯しております、お供先を切ったとはいえ、御無礼が過ぎませぬか泣寝入りにはいたしたくございません」

「然し……」

「いえ、よろしうございます、皆様に御迷惑がかかっても困ります、佐伯の小父様にも、御本陣へもお願いはいたしませぬ、私、自身で行ってまいります」

回向もろくろくしない間に、左市は家を飛び出した。

佐伯や七右衛門が止めようとしたがきかなかった。

生前、あれほど仲よくしていたくせに、いざとなるとたのみ甲斐のないのが悲しかった。將軍の御子息に怖れをなして、一身の安全ばかり考えているのが情けなかった。

泣き寝入りでは、父の靈も中有に迷おう。敵わぬまでも掛合いにだけは行ってやろう——そういう気だった。

本陣の表玄関には、葵の紋を打った高張が立っている。播州明石の城主、松平兵部大輔斎宣。十一代家斎將軍が第五十五番目のお子様だった。

生涯に二十数人の侍妾を持ち、五十四人の子供を産んだ家斉は、夥しい子女の養育に困って、諸大名と沢山の養子縁組をしている。斎宣もその内の一人だ、末から二

番目の子で、まだ十八だった。

「おたのみ申します」

玄関に立った左市が、

「松平様御家中のお方へお目通りいたしとうございます」

次の間に佐藤与一郎がいて、立ってきた。

「七曲りの土手下にて、お供の方に斬られました丹下左衛門の一子左市と申します。重役方にお目にかかり、お願いの筋があつてまいりました、お取次が願ひとう存じまする」

「如何なる願ひじゃ、取次は拙者がいたす、願ひの筋を申せ」

「重役方へお目にかかつて申上げとうございます」

「ならぬ、御用繁多にて、面会はならぬ」

「一応お取次下さい、当方に取りましても父を失いましたので……」

「参観のお道中は斬棄御免のお家柄だ、ツベコベ申すな帰れ」

与一郎は叫んだ。

これが、父を斬った敵とは左市も知らなかった。

「お道中の斬棄ては百姓町人でございましょう、浪人ながら父は武士でござる、中津川にては剣道の指南もいた

しております」

「何人も容赦はならぬ、当家を如何なるお家柄と存じおるか、忝けなくも將軍家の御子息にあらせらるるぞ」

「そのくらの弁えはござりまする」

「左市様！」

このとき左市の名を呼んで駈け寄った若い娘があつた。本陣の娘のお志保だつた。

七

「失礼があつてはいけません、此方へいらっしゃい、此方へいらっしゃい」

左市の手を引きずりながら、

「佐藤様、おゆるし下さいまし、御両親が亡くなったので転倒していらっしゃいます、私が代つてお詫びを申し上げます」

与一郎は柄頭を握っていた。

場合によれば斬つてしまふつもりだつた、それがお志保に判っているのです、

「左市さん、此方にいらっしゃい、此方へいらっしゃい」
玄關脇の暗い所へ引きずって行つた。左市はまだ何かいおうとしていた。が、お志保は左市の口を押えた。

「ものをいってはいけません、何にもいうんじやありません、いっちゃいけません」

「然し……」

「いいえいけません、黙っていて下さい、黙っていて下さい」

無理矢理に左市の口を閉じた。

七右衛門の二番目の娘で、名物に数えられる容色好しだつた。容色ばかりでなく、氣立のやさしい利発者で、左市とは幼な馴染だ。本陣の裏手には角力の土俵ができてゐる。中津川は角力の盛んな土地で、夏も冬も、町の若い者が集つてきて角力を取る、左市は西方の大関で、町角力筆頭の人気者だつた。

その土俵場へ左市を連れてきた。今夜は、松平様のお泊りがあるので、若い者も遠慮して、誰もきていなかった。

「お志保さん！」

暗いところへくると、左市は泣き出した。お志保の肩へつかまつて、忍び音に泣き出した。

お志保にも慰めようがなかった。一時に両親を失つた左市の悲しさには、いいようがないのだ。

「判っています、よく判っています」

お志保はやさしくいった。

「いくらお大名だからといって、こんな乱暴な話はありません、腹が立つのが当り前で、文句の一言ぐらいいいたくなるでしょう、左市さんのお心持はよく判りますが、今夜お泊りのお方は、今の將軍のお子様なんですよ」

「知ってる。將軍家から明石へ御養子に行った人だ」

「年はまだ十八で、疳癰の強い、お氣の短いお方で、明石様のお道中には、お供先を切って斬棄になった方がどのくらいあるか判らないのです」

「……」

「前年の参観にも、近江の追分でお百姓を三人もお斬りになって、大変な騒ぎを引き起したことがあります、ところが、明石様は、將軍様へお願いがしてあつて、参観道中斬棄御免のお許しを得ていらっしゃるのです」

本陣の娘だけに、お志保はよく知っていた。松平兵部大輔は十萬石の食祿のうち、五萬石を幕府に返上して「参観道中斬棄御免願」を出している。幕府では、その内二萬石を納め、八萬石を賜い「斬棄御免」の特権を与えているのだ。

他領通行の際でも、「斬棄勝手」の特権は、諸大名の

内で松平兵部大輔ただ一人であつた。この特権のために十八歳の若い城主は、二萬石の食祿を棒に振っている。「そういうお方に刃向つたら、どんな事になるか判らないじゃありませんか」

そういってお志保は左市をなだめるのだった。

町 角 力

一

本陣上段の間では、松平兵部大輔が、軀を持ちあつたて家臣達を困らせていた。

飯がすんでしまうと、する事がないので、余剩精力のはけ口もない参観道中では、家臣たちの芸くらべの外に楽しみがなかった。

道中が重なってくると、もうそれにも飽きがきて、「まだ寝られん、する事はないか、面白い事はないか」家臣たちも毎夜の事で、遊びの種がつきている。

「恐れながら、中津川の町は角力の盛んな土地で、町角力も東西に分れ、若い者もなかなか強いということでございます。主人に沙汰をいたして、町角力を御見物にな